

ヒルファディングとルクセンブルクの資本主義観

——段階概念の相違をめぐって——

保 住 敏 彦

I. テーマ

ヒルファディングとルクセンブルクは、ともにマルクス理論の継承と発展を図ったマルクス主義者として著名でありながら、その帝国主義論が異なっていることは、つとに知られている。前者の理論が資本蓄積論的帝国主義論ないし社会化論的帝国主義論と特徴づけられるのに対して、後者の理論は世界市場論的帝国主義論と特徴づけられた¹⁾。本稿では、こうした帝国主義論の相違の根底には、両者の資本主義観の相違があるのではないかという問題意識から、両者の理論の異同とその意味について論じる。

ヒルファディングは、アメリカ、ドイツの独占資本主義・金融資本主義を対象としながら同時代の資本主義の解明を目指したが、理論的な前提としては、19世紀イギリスの資本主義に基づいて構築された資本主義理論である『資本論』に依拠している。そのうえで、主著『金融資本論』（1910）においては、銀行信用と株式会社制度などの信用制度の発展と産業および銀行における独占の形成による金融資本の成立、金融資本の蓄積様式、および金融資本の政策としての帝国主義について明らかにしている。したがって、産業資本から金融資本への発展という形で、資本主義の自由主義的な競争的資本主義から独占的な金融資本主義への段階的発展を、認識している。かれの理論においては、ドイツやアメリカの資本主義の動向を念頭に置いた国民経済的な視点と自由主義から帝国主義への段階的発展という段階論的把握が、結びついている²⁾。

-
- 1) 降旗及び星野によって、こうした特徴づけがなされ、両者の間で論争がなされた。（降旗，1972），（星野，1975）を見よ。降旗が資本蓄積論的帝国主義と世界市場論的帝国主義を区別するのに対して、星野は前者を社会化論的帝国主義と特徴づけた。資本蓄積論的帝国主義論という概念では、金融資本の蓄積様式に基づく帝国主義の説明という見解が表明されているが、社会化論的帝国主義論という概念では、個別企業から株式会社をへて国有企業へという社会化の進展と帝国主義とが結び付けられている。
 - 2) 私は、『ヒルファディングの経済理論』（保住，1985）においては、『金融資本論』をレーニン『帝国主義論』に引き寄せて解釈し、ヒルファディングが帝国主義政策の総体を金融資本の経済的利害から生じたものと捉えることによって帝国主義の段階認識に達したものと解釈した。他方、「ヴァイマル共和国後期におけるヒルファディングの社会国家論」（保住，2010）においては、ドイツ革命後、かれが社会革命を通じて社会主義に到達する立場から、共和国の議会制度や労使の共同決定的な制度を通じて、改良的な方法で組織資本主義を社会主義的・民主主義的経済に変革するという立場に変わったと解釈した。第一次大戦とドイツ革命の帰趨によって、かれの立場は、大きく変わったが、金融資本による経済の組織化の進展とそれが資本主義の安定化をもたらすと見る点では、連続性があった。

ルセンブルクの資本主義観は、これに対して、資本主義経済のみを対象とせず、この経済がその再生産・蓄積のために必要とする非資本主義経済との関係（物質代謝・交換）を問題にしている。この観点からは、資本主義経済が非資本主義経済を侵食し、資本主義化してゆく過程が、問題となる。資本の本源的蓄積によって資本主義生産は成立するが、成立以後も資本主義経済内部だけでは資本蓄積を行うことができず、最初は国内の農民経済・手工業などを破壊しつつ蓄積し、次いで、海外の途上国の現物経済・共同体経済・小経営などを破壊しつつ蓄積する。最後に、国際的植民地政策を通じて、非資本主義的な世界環境の残部を巡る競争を行う。このような資本蓄積の世界史的展開の諸段階を区別している。そうした資本蓄積の展開は、最後に、世界市場の完成と呼ぶべき段階に到達し、そのとき、循環性恐慌が始まり、資本主義崩壊が不可避になる。彼女は資本蓄積（拡大再生産）についての独自の解釈³⁾により、世界市場の完成とともに、資本蓄積が不可能になり、崩壊に至ると考えたのである。

マルクス以後のマルクス経済学的发展は、カウツキー、ヒルファディング、レーニンの系譜でなされたと考えられたために、ルクセンブルクの独自の再生産論（資本蓄積論）解釈にもとづく、帝国主義観は軽視されてきた。彼女の理論に対しては、レーニンによる批判に依拠して、その再生産論の誤りを強調し、それに基づく資本主義崩壊論や帝国主義論を否定的にみるという評価が多かった⁴⁾。

しかし現代のようなグローバル化の時代にあって、先進国の金融資本（独占資本）の蓄積様式からのみ、その経済政策を説明することはできない。世界経済の複雑な絡み合いを把握する方法論が問題となる。というのも、先進国から発展途上国への一方的な帝国主義的な進出というよりも、世界経済のなかでの資本主義生産と非資本主義生産との複雑な絡み合いの展開が、いまや問題になっているからである。ローザの資本主義観は、その手掛かりの一つとなるのではないか。この問題を本稿では検討したい。

Ⅱ. ヒルファディングとルクセンブルクとの帝国主義論の相違

ルクセンブルクとヒルファディングとの帝国主義観の相違については、宇野学派の星野氏や降旗氏によって論じられた。それによると、ルクセンブルクは世界市場論的視角にたち、ヒルファディングは資本蓄積論的ないしは社会化論的視角に立つという相違があったという。

事実、ルクセンブルクは、チューリヒ大学に提出した学位論文『ポーランドの産業発展』

3) 資本蓄積（拡大再生産）は、資本家と労働者から成り立つ純粋資本主義においては、困難であり、資本主義生産の生産物に対する非資本主義的社会階層の購買力（需要）を必要としているという見解。というのも、社会的な拡大再生産に際して、増大して生産された剰余価値を胎化する生産物に対する購買者がどこにいるのかという問題、したがって、そうした剰余価値生産物を購入する貨幣が、どこから来るのかという問題があるからである。

4) （海道，1964）および（佐川，1979）のローザ再生産論批判は一例である。精緻な研究であるが、ローザ再生産表式解釈への評価という点では、レーニンに従っている。

(1898)においてすでにポーランド経済をロシア経済との密接な関係において捉えている。また、ベルンシュタイン修正主義を批判し、ドイツ社会民主党へのデビュー作となった『社会改良か革命か』(1899)においては、世界市場の完成とともに資本主義崩壊が不可避になると論じ、資本主義を国民経済としてよりは世界資本主義と捉えた。『経済学入門』(1909-10)の冒頭で、ドイツ歴史学派のクニースの国民経済学に関する定義を批判し、純粹の国民経済なるものは存在しないと論じたことも周知の事実である。主著『資本蓄積論』(1913)においては、マルクスの再生産論についての彼女なりの解釈に基づき、世界市場を資本主義的生産領域と非資本主義的生産領域との物質代謝の場と捉え、資本主義化の中で後者が減少して行くところに、資本主義崩壊の必然性があると捉えた。

したがって、彼女の理論においては、資本主義生産そのものが、その生産物を販売し、資本蓄積を続けうるためには、非資本主義生産領域との物質代謝を必要としており、国内で不足の場合には、海外にそれを求めざるを得ないのである。資本主義生産そのもののなかに、帝国主義的進出を行う必然性がある。自由主義的な産業資本が、独占的な金融資本に転化しなくても、先進資本主義は帝国主義への傾向性を持つということになる。

これに対して、ヒルファディングは、産業資本主義の時代には、産業資本は自由主義的な政策をとったが、金融資本の産業支配が進展し、金融資本が支配的資本となるとともに、カルテル保護政策・資本輸出・植民地政策等からなる帝国主義の諸政策が取られるようになったと見る。資本主義発展において、自由主義段階、帝国主義段階を区別し、帝国主義をもっぱら金融資本の特有の蓄積様式から発生したものと論じた。まるで、本来の資本主義は、帝国主義的ではなく、平和的で自由貿易主義的なものだと思っていたようである⁵⁾。こうした資本主義観から、自由主義的な資本家グループと社会民主党との提携によって、帝国主義から自由主義への政策転換も可能だとする、第一次大戦直前のカウツキーやベルンシュタインの戦略も成立することが出来た。事実、社会民主党は、1898年の党大会での貿易政策をめぐる論争での決定により、それ以後、ドイツの帝国主義政策の一つであるカルテル保護関税に対して自由貿易を対置したのであった。

これにたいして、ルクセンブルクには、最初から、世界経済を資本主義生産と非資本主義生産が結び付いたものと捉える視点があり、それぞれの国民経済の独立性と各国民経済の商品輸出・資本輸出を介しての外的結合とは捉えていなかった。したがって、ルクセンブルクは、ヒルファディングのように、国民経済における支配的資本の資本蓄積様式を探り、その政策として帝国主義を捉えという視点と方法を採らなかった。

ルクセンブルクの理論においては、資本主義生産と非資本主義生産との間で財貨と人の移動による物質代謝が進展する中で、資本主義生産の拡大とその資本蓄積衝動によって減少する非資本

5) スミスを初めとする古典学派の資本主義像は、自由競争を特徴とする商業社会であり、マルクスも19世紀のイギリスに見られた競争的資本主義を前提にして『資本論』を執筆した。19世紀特権論とも呼ばれるように、この時代の資本主義を資本主義の本来の姿とみる見方が、古典学派のみならずマルクス学派にもあった。ヒルファディングは、その代表の一人だった。また、新古典派の市場経済のモデルも、19世紀イギリスの競争的資本主義を想定したものから出発する。

主義生産領域という矛盾のなかで、資本主義生産がその所在地の国家権力を用いて、非資本主義領域の一部を独占しようとする努力が、帝国主義と見做されたのである。したがって、この場合は、資本主義生産一般の発展に帝国主義の根拠があり、産業資本の金融資本（独占資本）への発展に根拠があるわけではない。彼女の帝国主義観は、彼女の資本主義観そのものに根ざしていたのである。

Ⅲ. ヒルファディングの資本主義観の特徴

ヒルファディングの『金融資本論』とかれの経済問題を取り扱った論文をよむと、かれの経済観には次のような特徴があることが、分かる。すなわち、(1) 市場経済と共同経済との対比、(2) 各国資本主義の国民経済的把握、(3) 自由主義的な産業資本と独占的な金融資本との区別およびそれに基づく自由主義段階と金融資本主義段階の区別、である。

1. 市場経済と共同経済との対比

ヒルファディングは、『金融資本論』の冒頭の貨幣を論じた際に、人間の生産共同体を、意識的に規律された社会と意識的組織のない社会とに二分し、前者には原始的な共産主義社会や将来の社会主義社会・共産主義社会が含まれ、後者には私有と分業によって個人にまで分解された資本主義的商品経済が含まれるとみた。しかしながら、私有と分業によって個人にまで分解されると同時に相互依存される社会とは、スミスの『国富論』における分業に基づく商業社会のイメージと同じである。つまり、ヒルファディングは、さしあたり、私有と分業に基づく、ないしは商品交換を基盤とした社会という次元で、資本主義生産の社会を捉えていると言える。商品交換、あるいは商品流通をその第一の特徴と捉えている。

2. 各国資本主義の国民経済的把握

ヒルファディングの資本主義観の第2の特徴は、かれが資本主義を国民経済として把握したことである。かれは、各国の資本主義の把握と、それらの国民経済の集合体としての国際経済という捉え方に立っている。そして、各国資本主義を捉えるために、その支配的な資本の蓄積様式に注目している。経済政策は、そうした支配的資本の利害に基づく、資本と政府の政策と捉えている。しかし、そうした把握の仕方は、ドイツ歴史学派の国民主義的な資本主義観と通底するものである。歴史学派の影響はドイツ社会民主党のカウツキーやベルンシュタインもみられた事態である⁶⁾が、オーストリア・マルクス主義者に属すとされるヒルファディングにも、そうした影響が見られる。普遍主義的なオーストリア学派の理論への対抗意識のために、歴史学派的な国民経済としての資本主義把握に親近感を持ったのであろうか。マルクスが19世紀のイギリス資本主義

6) この点については、わが国での纏まったカウツキー研究のモノグラフィーである（相田，1993）が参照されるべきである。

をモデルとしたように、ヒルファディングは19世紀末から20世紀初頭に世界経済をリードしたアメリカとドイツをモデルとして帝国主義期の資本主義を解明したのであった。

3. 資本主義の段階的な発展という観点

ヒルファディングの資本主義観には、段階論というべきものがあり、特に自由主義的資本主義から金融資本主義的資本主義への発展という認識がある⁷⁾。その核心にあるのは、前者では、自由主義的な産業資本が中心であるが、後者では金融資本が支配的であるという認識である。『金融資本論』では、金融資本の成立史を第一編から第三編で論じ、第四編では、金融資本の下での恐慌の形態変化を論じ、第五編では金融資本の経済政策として帝国主義を論じるという構成になっている。自由競争の行われる自由主義的資本主義から、独占の支配する金融資本主義への発展は、必然的なものとして捉えられている。レーニンも、ヒルファディングにおいては帝国主義か自由主義かは政策の問題と捉えられており、必然的発展という把握が無いと批判するが、ヒルファディングも産業資本から金融資本への発展を必然的発展と捉えている。また、帝国主義は、カルテル保護関税、資本輸出、植民地政策等の金融資本の経済政策の総体と捉えられている。

Ⅳ. ルクセンブルク資本主義観の特徴

ローザ・ルクセンブルクの資本主義観の特徴は、(1) 国民経済的観点を否定し、世界市場的観点にたつ、(2) 資本主義生産と非資本主義生産との物質代謝という観点をとる、(3) 世界市場の完成とともに資本主義は崩壊するという想定に立っていること、などである。

ルクセンブルクは、『ポーランドの産業的發展』⁸⁾において既に、ポーランド経済をロシア経済との不可分の結び付きにおいて捉えようとした。同書は、第一部「ポーランド工業の歴史と現状」において、マニュファクチャー時代から大工業時代への発展を歴史的に振り返った。そこでは『資本論』の第一巻においてイギリスについて指摘された手工業からマニュファクチャーを経て機械制大工業にいたる過程を、ポーランドもまた辿ってきたこと、その際、ロシアがポーランドの工業化に大きな役割を果たしたことを明らかにした。第二部「ポーランドにおけるロシアの経済政策」では、ポーランドの工業化が、ロシア政府の政策によって促進されたことが明らか

7) ヒルファディングの段階論的認識は、『ノイエ・ツァイト』誌に掲載された、処女論文「保護関税の機能変化」(1903)に見られる。そこでは、19世紀末のドイツの農・工の高率関税が、リストの提唱するような育成関税ではなく、カルテル保護関税に転化していること、その背後に資本主義の段階的な変化があることが示されている。さらに、そこからすすんで、資本主義が最終段階に入ったという認識が示される。こうした観点から、ドイツ・アメリカ等の資本主義の現状を研究し、『金融資本論』は執筆されている。ヒルファディングが、同書において、金融資本の蓄積を中心に、帝国主義現象を解明した際、そうした終末論的なイメージを抱いていたことを、否定することはできない。その点では、倉田氏の評価するように、同書は、崩壊論したがって終末論を否定するベルンシュタイン修正主義論を批判する意図に基づいて書かれているのである。

8) この彼女の博士論文の訳には、肥前の既訳(肥前, 1970)があるが、この度、小林による新訳(小林・スキルムント, 2011)が出された。

にされる。ロシア政府は、ポーランドの支配階級であり、ロシアに反抗的な貴族層に対して、ロシアとの経済的結び付きのためにロシアに友好的な産業ブルジョワジーを育成する経済政策を採っていることを明らかにする。この関連で、ポーランドとロシアとの経済的結び付き、「ポーランドとロシアの資本主義的融合」が指摘されている。ここに既に、完結した国民経済という把握を超え、世界経済的な把握に向かうローザの視点の端緒を見ることが出来る。

また、修正主義論争（1898-1903）⁹⁾におけるルクセンブルクのベルンシュタイン批判の論文『社会改良か革命か』では、ベルンシュタインの資本主義の適応能力論による資本主義崩壊論批判に反論して、資本主義崩壊を世界市場の完成論から論証しようとした。すなわち、世界市場の完成とともに、資本主義は需要不足に陥り、崩壊すると論じた。

『社会改良か革命か』は、第一部と第二部からなり、前者はベルンシュタインの連続論文「社会主義の諸問題」（『ノイエ・ツァイト』誌、1897-1898）に対する批判で、『ライプチガー・フォルクス・ツァイトゥンク』（1898年9月）に掲載された。後者は、ベルンシュタインの『社会主義の諸問題と社会民主党の任務』（1899年1月）における反論に対する再批判であり、同じく『ライプチガー・フォルクス・ツァイトゥンク』（1899年4月）に掲載された。彼女は、この論文のまえがきにおいて、ベルンシュタインが社会改良と革命とを分離し、社会改良を肯定し、革命によって社会主義を達成するという最終目的を放棄したと批判する。そして、そうした立場は「党に入ってきたブチブルジョア的分子の優位を確保しようとする」努力だと批判した。第一部では、ベルンシュタインが「資本主義の適応能力」によって資本主義崩壊論を否定し、労働者の地位向上と社会的統制の拡大によって社会主義の導入を図るという路線を採ることを批判した。そこでは、ベルンシュタインが資本主義の適応能力をもたらし要素として挙げた、信用制度、企業家連合、および中間層の増大について、批判した。ベルンシュタインは、信用とカルテルが生産を調整することによって資本主義の無政府性を克服する作用を持つと見るのに対して、ルクセンブルクは信用とカルテルが無政府性を強め、恐慌の原因となると批判する。中間層の没落かどうかという問題でも、前者が中間層の発展による資本主義の安定論を主張するのに対して、後者はその没落と階級分解の進展を主張する。さらに、前者が労働組合や消費組合の社会改良による社会主義の導入を主張するのに対して、ルクセンブルクは労働組合は「賃金闘争と労働時間の短縮の問題」に限定されるだけで、「政治的な社会主義的な階級闘争の高揚」は出来ないと見た。

第二部では、社会主義は「資本主義社会の経済関係」から「歴史的必然性」をもって実現されるものという観点から、ベルンシュタインのルクセンブルクへの批判に対して反論を行った。ベルンシュタインが、株式会社における株主の増加をもって資本家の増加と捉えたことに対する反論、また、カルテルや信用が、生産の無政府性に対する対抗手段であるというベルンシュタインの見解に反論した。ベルンシュタインが協同組合と労働組合を社会主義的改革の手段と見ること

9) この論争について、修正派の機関紙「社会主義月報」、左派の機関紙「ザクセン労働者新聞」、および党中央の機関紙「前進」などの論文に基づいて、両者の主張を検討したのが、拙著『社会民主主義の源流』（保住、1993）である。ローザの見解についても論じている。

に反対した。それらは資本主義的分配に影響を及ぼすことが出来るが、「資本主義的な生産様式を変革する力を持っていない」と反論した。さらに、ベルンシュタインが、政治的民主主義の発展が社会主義実現の前提条件であると評価するのに対して、ルクセンブルクはドイツでは「民主主義発展の運命が社会主義運動に結び付けられている」(Luxemburg, 1970, 426・427)と反論する。さらに、ベルンシュタインが立法による改良を提唱するのに対して、「それは、社会主義の制度の実現を目指すものでなく、たんに資本主義制度の改良を目指して」と批判する(Luxemburg, 1970, 429)。彼女の主張は、「プロレタリアートによる政治権力の奪取と資本主義制度の廃止」を訴えることであった。もっとも、彼女は、民主主義がプロレタリアートのブルジョワ社会変革のための政治形式を作りだすこと、また、民主主義のための闘争の中でプロレタリアートはその階級利害と歴史的使命を自覚しうることを指摘している。また、「ブルジョワ社会の崩壊ということは、科学的社会主義の礎石である」(Luxemburg, 1970, 436)という立場から、ベルンシュタインの崩壊論否定に反論した。そして、ベルンシュタインの理論は日和見主義に理論的基礎を与える試みだと批判した。

このように、この『社会改良か革命か』において、ルクセンブルクはベルンシュタインによるマルクス主義への批判と修正主義論の提唱に反論している。それが、マルクスその人の理論の批判ではなく、カウツキーの解釈にたつドイツ社会民主党の受容したマルクス主義のバイアスを受けたものであることは、今日、明らかにされている。社会主義鎮圧法による長期の弾圧を経験した社会民主党が、マルクス理論によって基礎づけられた資本主義崩壊論を信じ、その崩壊を待機するという待機主義・静観主義に陥ったことに対して、ベルンシュタインは批判したのであった。ベルンシュタインが改良主義的に実践的であったように、ルクセンブルクは革命的に実践的であった。しかし、修正主義論争の時点では、彼女はカウツキー、ベーベルなどとともに、ベルンシュタインに対抗したのであった。

注目すべき点は、この『社会改良か革命か』において、彼女が「世界市場の完成」の時期の到来という観念を提出したことである。彼女は資本主義崩壊が問題になるのは、世界市場の完成された時期であり、その時には、「真の資本主義的な循環性恐慌が引き起こされる」とみた。彼女が、資本主義崩壊論という時、この世界市場の完成の下での循環性恐慌の発生という事態を想定していた。(Luxemburg, 1970, 385-386 参照) 他方、ベルンシュタインが資本主義の適応能力の手段と評価する信用制度と企業家組織は、そうした世界市場の完成をもたらす手段にすぎないと、彼女には思えたのであった。

『経済学入門』¹⁰⁾においては、歴史学派の主張する国民経済あるいは国民経済学概念そのものを否定し、世界経済としての把握が必要と論じた。そして、同書の最後の章「資本主義経済の諸傾向」においては、それまでの章が、資本主義生産の成立と存続の条件を論じたのに対して、

10) 本書は、彼女の SPD 党学校での講義に基づくもので、1909-10年に一度刊行され、その後、1916年頃獄中で加筆され、1925年に刊行された。本書の邦訳には、(佐野、昭和8)と、(岡崎・時永訳、1991)がある。

今や「資本主義経済を不可能にする事情を知るべき時期に達した」という。ヨーロッパ各国の資本主義は、自国の手工業生産や小農生産を駆逐しながら発展し、ついで、世界貿易と植民地侵略を通じてヨーロッパの後進国だけでなく、アメリカ、アジア、アフリカなどを世界経済に引き込む。まず第一段階では、これらの地域の古い生産様式を破壊し、これらの地域を商品経済に転化させ、ついで第二段階で、原住民から土地やそのたの生産手段が収奪される、かれらは賃労働者化される。最後に第三段階で、ヨーロッパ資本あるいは土着の資本によって資本主義生産が生み出され、資本主義経済に転化させる。このようにして、これまで非資本主義的生産様式の支配していた諸地域が世界経済に組み込まれる。人間のための生産でなく、利潤のための生産がch 空全体に広がるという。

それだけでなく、世界市場の成立は、新たな問題を成立させる。それは、「生産の拡張要求」と生産された商品の「販売可能性」との矛盾である。資本主義生産が各国に広がり、世界経済が完成するとともに、資本主義企業の生産欲は競争の激化により、また、その利潤要求によりますます増大する。これに対して、商品の販売可能性は、消費者側の支払い能力ある需要と、生産された商品の量およびその価格との関係によって定まる。この両者の衝突から「商工業恐慌が不可避免的に発生する」。この点において、「資本主義の存立不可能性」が、明らかになったと主張する。

松岡利道氏は、『経済学入門』第6章の冒頭における第5章の内容の要約の文章を根拠に、彼女がこの循環性恐慌を資本主義経済の存続の契機と捉えたと評価している。彼女はまず資本主義経済が完全に無計画的で無政府的であるにもかかわらず存続し得る諸条件を挙げ、その最後に「価格の変動と恐慌」が周期的に生産と欲求との均衡をもたらすと指摘した。だが、他方では、同書第6章末尾において、世界市場の完成とともに資本主義崩壊をもたらす循環性恐慌が始まると結論づけていることも指摘し、彼女がこの矛盾を解決するために、『資本論』とりわけその再生産論の再検討に向かったのだと解釈している¹¹⁾。そこで、次に、『資本蓄積論』(1913)における、ルクセンブルクの資本主義観をみよう。

ルクセンブルクは、『社会改良か革命か』においてすでに、世界市場の完成とともに資本主義崩壊をもたらす循環性恐慌が勃発すると見做した。『資本蓄積論』において、彼女は如何にして世界における資本主義の資本蓄積過程の展開の結果として世界市場が完成し、資本主義崩壊が必然となるか、証明しようとしたと言える。同書において、資本主義と非資本主義との物質代謝という視点と、世界市場の完成とともに資本主義は崩壊するという想定が、もっとも明確に表れている。

産業資本の支配する自由主義段階から金融資本の支配する独占資本主義段階への発展というような段階論ではなく、資本主義の本質は当初から国内的にも国際的にも非資本主義的社会階層と環境を搾取し収奪する抑圧的な体制だと捉えている。資本主義生産はその成立後も、本源的蓄積

11) 松岡利道 (1988) 『ローザ・ルクセンブルク、方法・資本主義・戦争』新評論, 224-231参照。このように、彼女は恐慌について、資本主義存続の条件の一つと見ると同時に、資本主義の存続不可能の一条件とも捉えている。恐慌は、生産と消費に均衡をもたらすとともに、資本主義崩壊を不可避にする作用をも持つと見ていた。

過程と同様に、非資本主義的社会状態に対する暴力と収奪を特徴としていると見做した。というのも、資本蓄積は、非資本主義的社会階層にその購買者を見出さなければならないからである。

しかし、彼女の資本主義観に段階論的なものがなかったといえ、そうではない。彼女は、資本蓄積史のなかで、段階的な発展がなされたととらえている。すなわち、資本主義生産の成立後は、まず国内の農民経営と手工業の破壊や農業からの工業の分離などによって蓄積が進められ、さらに海外の非資本主義社会状態（現物経済・小経営・共同体的生産など）を破壊し資本主義化することによって蓄積が進められ、最後に、各国の資本が、非資本主義的な世界環境の残部を巡って、植民地政策の展開によって競争する、帝国主義の段階に到達するとみている¹²⁾。帝国主義は、金融資本・独占資本の蓄積から必然的に生じたものとは捉えず、資本主義領域と非資本主義領域との物質代謝である、世界市場の構造変化から生じたものと捉える。この構造は、資本主義生産の初めから終わりまで存続するものであるが、その内実は変容し、その結果、資本主義生産の崩壊をもたらす最終段階に達するものとみている。こうした見方は、『資本蓄積論』において、典型的に見られる¹³⁾。

第25章「拡大再生産表式の諸矛盾」では、前編の叙述を前提に、『資本論』第二巻におけるマルクスの拡大再生産表式を批判している。ルクセンブルクの批判点は、資本蓄積の進展に伴う資本の有機構成の高度化が、表式の年度をおった展開にとり入れられていないが、この高度化を取り入れた表式では生産された剰余価値のなかに実現しない部分が発生することである。他方では、マルクスは『資本論』第一巻の「利潤率低下法則の内的な諸矛盾」の章においては、剰余価値の生産の条件とその実現の条件との矛盾を指摘し、前者が社会的生産力によって制限されているのに対して、後者は社会の消費力によって制限されているので、剰余価値の生産とその実現とは一致しないと論じていると指摘する。したがって、第一巻におけるこの叙述と、第二巻の拡大再生産表式（生産と実現とは矛盾せず、一致していると見る）とは矛盾していると批判した。そして、「第26章 資本の再生産とその環境」においては、前章でのマルクス拡大再生産表式への批判に基づき、資本蓄積のためには資本主義生産の内部での商品交換によっては実現できない剰余価値の一部を実現するためには、非資本主義的な社会階層と社会形態とに依拠せざるを得ないと結論付けている¹⁴⁾。

12) 『入門』における三段階とは異なるが、『蓄積論』においても、資本主義生産が非資本主義生産を破壊し資本主義化する過程を三段階に分けて論じている。資本蓄積史の展開の中で、資本主義の諸段階を区別するという、彼女の視点が明らかである。帝国主義もそうした世界的な資本蓄積史の最終段階と捉えられている。ヒルファディングのような支配的資本の変化に基づく段階認識ではないが、資本蓄積のための政策の変化（国際植民地政策の成立）によって、帝国主義段階を区別していると、評価できるのではなかろうか。

13) 世界的な資本蓄積の進展による世界市場の構造変化と、その結果としての世界市場の完成と崩壊の開始という彼女の構想は、マルクスの資本蓄積論（拡大再生産論）への批判に基づいている。このため、第29章末尾にも、マルクス拡大再生産表式への批判が、述べられている。

14) 資本主義的蓄積は、具体的歴史過程としては、二つの側面で行われ、一方では、剰余価値の生産場所——工場、鉱山、農耕地——において、そして商品市場で行われる。ここでは、蓄積過程は「形式上、平和・所有・平等が支配する」資本家と労働者との商品交換として行われる。他方では、資本蓄積は、ノ

第27章「自然経済との闘争」においては、「資本主義は、歴史的には非資本主義的な社会環境の中で姿を現し、発展する」という観点から、その非資本主義的な社会環境として、自然経済との闘争、商品経済との闘争、蓄積諸条件の残部をめぐる世界舞台での資本の競争、という三段階を挙げている。自然経済の歴史的形態としては、奴隷経済、封建制、原始共産制、家父長制的農民経済などを挙げている。また、自然経済との闘争における資本の経済目的は、生産力の源泉としての土地と産物の略奪、労働力を賃労働者に変えること、商品経済の導入、農業から農村工業を分離することを挙げている。本源的蓄積における農民の賃労働者への転化の過程が、近代的植民地政策においても資本によって行われる。

第28章「商品経済の導入」においては、自然経済的な諸団体の破壊とともに、これらの諸団体を商品流通に引き入れる試みがなされたが、それは、剰余価値の実現のための必要条件であったという。剰余価値の生産は、暴力による生産力の奪取や、暴力による労働の強制によっても可能であるが、剰余価値の実現のためには、商品流通の拡大が必要であり、そのためには、商品の購買者の拡大とそのための交通機関の発達が不可欠であるとみなした。したがって、自然経済の地域を商品経済化することが、必要となる。そのように自然経済を商品経済に取り込む試みが、ヨーロッパ資本による中国の開放の努力であり、アヘン戦争の結果としての中国の諸都市の開放だったとのべ、その過程を詳しく述べている。

第29章「農民経済との闘争」においては、現物経済との闘争の最後の段階が、「農業と工業との分離、農民経済からの農村工業の分離」であり、農民は、自家需要のための手工業をもっていたが、資本主義生産はこれらの農村工業を破壊し、農民を資本の生産物の需要者にする。これは、資本の剰余価値の実現に資するものである。政府は租税、戦争、浪費、などによって、この過程を助長した。こうした過程の実例として、彼女は、アメリカにおけるイギリス資本の活動を紹介する。アメリカにおいてイギリス資本は、インディアンについてその土地を奪った農民を、自給自足の独立的存在から、資本の生産する工業製品を購買する消費者に転化した。南北戦争後の近代的交通業と機械制工業の発展は、農民の置かれた状況を変化させ、自営農民つまり単純商品生産者は、没落し、賃労働者に転化する。他方で、資本主義的大農経営も増大する。資本は、現物経済を商品経済化し、ついで、これを資本主義化するとみる。こうして、「……資本蓄積は非資本主義的構成体なしには存立できない。非資本主義的構成体の不断の前進的粉碎のうちにのみ、資本蓄積の存在諸条件が与えられている。」(Luxemburg, 1969, 393, 太田, 2011, 152) という彼女の基本命題が述べられる。

第30章「国際借款」で初めて「資本蓄積の帝国主義段階あるいは資本の世界的競争の段階」という言葉が用いられ、自然経済に代わって商品経済を導入したように、「資本による従来の後背地の工業化と資本主義的開放」がなされるが、そのための手段が、「対外借款、鉄道敷設、革命、戦争である」。また、それが行われたのは、ロシア、トルコ、ベルシャ、インド、日本、中国

、資本と非資本主義的生産諸形態との間で行われ、世界を舞台として行われる。そこでは、暴力・詐欺・圧迫・略奪を伴う植民地政策が行われる。

——そして北アフリカであるという。その具体的な例として、イギリス、ドイツ、ベルギーなどによる、これらの地域における鉄道建設とそのための対外借款が論じられている。イギリスのエジプトへの投資、ドイツのトルコのバグダート鉄道への投資について、具体的に説明している¹⁵⁾。

第31章「保護関税と蓄積」においては、ルクセンブルクの有名な帝国主義の定義「帝国主義は、まだ押収されていない非資本主義的世界環境の残部をめぐる競争戦における、資本蓄積過程の政治的表現である」(Luxemburg, 1969, 423, 太田, 2011, 201)が、述べられる。非資本主義的領域の獲得をめぐる資本主義諸国の競争の中で、帝国主義はエネルギーと暴力行為を増加させる。だが、帝国主義が非資本主義文化を没落させればさせるほど、帝国主義はその資本蓄積の基盤を喪失する。「帝国主義は、資本の生存延長の一歴史的方法であると同様に、その生存に最も短期間にピリオドを打つ最も確実な方法でもある」(Luxemburg, 1969, 424, 太田, 2011, 202)。このように、資本が帝国主義という方法をとって、非資本主義領域を奪い、その資本主義化を進めることが、資本蓄積の土台を奪い、資本主義を崩壊させるとみなしている。

ルクセンブルクは、第30-31章において、資本蓄積史の新段階として、国際借款、高率保護関税を手段とした帝国主義的な植民地政策による資本蓄積が開始されたとみる¹⁶⁾。したがって、彼女に段階論がなかったとは言えない。先進国における支配的資本の変化による段階の区分という観点はなかったが、資本蓄積史から見て、資本主義領域内での蓄積と、国内および海外の非資本主義的領域(現物経済・封建経済・農民経済など)を破壊し商品経済化しながら蓄積する段階と、国際借款と高率保護関税制度による非資本主義的な世界環境を奪い合う帝国主義的な段階を区別している。資本主義の通時的なメカニズムとしての資本蓄積に関する独自の見解に基づき、世界的な資本主義発展のなかで、先進国の資本主義化とそこでの資本による現物経済・農民経済の破壊と商品経済化の段階、ついで、世界的な次元での原始共産制・封建制・農民経済などの破壊と商品経済化、最後に、植民地政策によって、世界の残された非資本主義領域を自国資本のために奪い合う帝国主義の段階を区別している。こういう意味では、ルクセンブルクに段階論はなかったということは、できない。先進国の資本主義における支配的資本の交代による段階区分という理論がなかっただけである。これまでルクセンブルクの経済理論には段階論がなかったと評価されてきたが、世界的な資本蓄積の歴史には前述のような段階論があったといえる。

15) 本章でもまた、マルクス再生産表式への批判が述べられている。「それゆえに、対外借款の役割と外国の鉄道株・鉱山株への投資の役割は、ともに、マルクスの蓄積表式に対する最善の批判的例証である」(Luxemburg, 1969, 404, 大田訳, 2011, 172)と。というのも、過去に生産された剰余価値の実現は、外国での鉄道建設とそのための対外借款によって、なされたからである。

16) 資本蓄積論の第32章「軍国主義」においては、国際的植民地政策の展開が軍国主義とりわけ海軍軍事力の増強を伴うことが指摘されている。それが資本蓄積のための需要をもたらすという点で、非資本主義的階層の需要と似た作用をもつことが示されている。

V. 両者の資本主義観の相違とその帰結

1. 両者の見解の相違のまとめ

ヒルファディングとルクセンブルクの資本主義観の相違点と一致点をまとめよう。まず、両者ともに、資本主義経済が何らかの集権的な組織による意識的な生産の統制を欠いた無政府性を持っており、その結果、価値法則によって支配された商品経済であるとみていた。その対極にあるのは、原始共同体・古代社会や封建社会の共同経済・共産主義社会のような、共同体経済である。

他方、両者の資本主義観の相違点は、どうか。ヒルファディングは、信用制度（銀行と株式会社）の発展と資本の独占化の進展から金融資本の成立を説き、この金融資本によって資本主義の組織化が進み、その結果、資本主義の無政府性が部分的に克服され、敵対的ではあるが安定した経済が成立するとみる。産業資本の支配する自由競争的資本主義から金融資本の支配する金融資本主義へと段階的に発展するとみる。この際、産業資本から金融資本への支配的な資本形態の変化を基軸に、競争的資本主義から金融資本主義への発展がなされるという形で、段階認識がなされている。『金融資本論』では、金融資本による資本主義の組織化の進展とその結果としての資本主義の安定化という見通しを持つと同時に、先進諸国の金融資本が帝国主義政策を採ることによって、帝国主義的対立が発生し、世界戦争が不可避となっているとみる。第一次大戦前には、後者の緊急性から帝国主義に対して社会主義を対置した。

これに対して、ルクセンブルクは、世界的な資本蓄積の歴史を、幾つかの段階を経て展開するものと捉えた。資本は、まず自国の現物経済・農民経済・手工業等を破壊しながら資本蓄積を進め、ついで、海外の現物経済・商品経済を破壊し資本主義化する。最後に、世界的な資本蓄積の進展の結果、先進国の資本は国際的な植民地政策（高率保護関税、対外借款、軍国主義を伴う）をくりひろげることにより、自国資本の資本蓄積に不可欠な非資本主義的領域の残部を巡る競争をせざるをなくなる。この世界市場の完成された段階で、資本主義の崩壊に繋がるような循環性恐慌が不可避になるとみる。したがって、彼女には段階認識が無かったと言うことはできず、段階認識の枠組みや使用する概念が、ヒルファディングやレーニンとは異なっていたと言える。彼女の再生産表式批判に注目するあまり、彼女が異なった枠組みに立ってではあるにせよ、帝国主義の段階認識に達していたことを見落とすべきではないだろう。

両者の政治的な立場について言えば、ヒルファディングは、第一次大戦前には、諸国の帝国主義政策の推進により帝国主義戦争が不可避になるという、社会革命に連なる見解をとったが、大戦後のヴァイマル共和国期には、組織資本主義の改良を通じて社会主義を実現するという社会改良主義に立った。これにたいして、世界市場の完成とともに資本主義崩壊の時期が来るとみなすルクセンブルクは、社会革命の道を進み、ドイツ革命においては、レーテ（全国労働者・兵士評議会）独裁による社会主義革命を目指した。しかし、ドイツ革命において右派の義勇軍に殺害さ

れず、ヴァイマル共和国期にも社会主義運動を進めた場合、どのような立場をとったかは未知数である。彼女が殺害される契機となった、ドイツ共産党の1919年の一月闘争は、憲法を制定するヴァイマル国民集会の選挙への反対運動から始まったが、彼女自身は1918年12月のドイツ共産党の創立会議においては、国民集会の選挙への参加を認める少数派に属していた。

2. 両者の資本主義観の異同の理論的意味

マルクス以後のマルクス主義の展開に関して、これまでの研究史においては、圧倒的に、ヒルファディングおよびそれを継承したレーニンの理論が、高く評価されてきた。金融資本および独占資本の成立史とその蓄積様式の解明を基礎にして、金融資本主義と帝国主義の段階を解明したことが、マルクス理論の発展として評価されたのである。これに対して、ルクセンブルクの『資本蓄積論』は、その拡大再生産表式と資本蓄積の解釈に誤りがあるものとして批判され、したがってそうした解釈に基づく資本蓄積史と帝国主義観も誤ったものとして、批判されてきた。しかし、グローバル化の進展する現代世界経済をみれば、資本蓄積が資本主義生産の内部での商品交換だけでなく、資本主義生産と非資本主義領域との商品交換および物質代謝によって行われているという見方は、否定することができない。むしろ、そうした世界市場論的観点に立つことによって、グローバル化時代の世界経済をうまく理解できるのではないだろうか。ヒルファディングやレーニンのように、先進諸国の金融資本の経済的政治的利害関心からのみ世界を捉えることは、一面的な理解におちいるのではなかろうか。先進国の金融資本の蓄積様式やその経済的利害からその経済政策を理解するだけでなく、世界的な資本蓄積の歴史の展開のなかで、現代資本主義を捉える必要がある。ルクセンブルクが『資本蓄積論』の第三編で行ったような、資本主義生産と非資本主義生産との物質代謝、貿易と資本や労働力の移動についての具体的な把握に基づいて、現代資本主義を捉える必要があるように思われる。

その後のマルクス理論の展開のなかで、従属理論や世界システム論が論じられるようになったが、これらの理論は、ヒルファディングやレーニンよりは、ルクセンブルクの資本蓄積史的な観点を引き継いでいる。また、剰余価値の実現のためには、資本主義生産以外の生産領域や社会階層の購買力、あるいは軍国主義のような固有の資本主義的再生産の外部の需要が必要だという、有効需要に注目する立場は、ケインズ理論にも通底するものであり、現代的意義を持っている。こうした観点からすると、ポスト・マルクス主義の歴史におけるルクセンブルクの位置は再検討される必要があると思われる。

文 献

- 相田慎一、『カウツキー研究——民族と分権——』、昭和堂、1993。
海道勝穂、ローザ・ルクセンブルク拡大再生産表式の基本的性格、『土地制度史学』、第7巻第1号、1964。
上条勇、帝国主義論史におけるヒルファディング：星野中・保住敏彦両氏の所説をめぐって、『金沢大学教養部論集』、人文社会篇22(1)、1985-03。
上条勇、『ルドルフ・ヒルファディング、帝国主義論から現代資本主義論へ』、お茶ノ水書房、2011。

倉田稔,『金融資本論の成立』,青木書店,1975.

黒滝正昭『ルードルフ・ヒルファディングの理論的遺産』近代文芸社,1995.

佐川悠二,ローザ・ルクセンブルク再生産論の基本的性格(研究ノート),『土地制度史学』,第29巻第3号,1979.

降旗節雄,『帝国主義論の史的展開』,現代評論社,1972.

星野 中,帝国主義論史における『社会化』論的系譜——降旗氏の所説をめぐって——,(1),大阪市大,『経済学雑誌』,72-2,1975. 2.

星野 中,崩壊論と帝国主義論;ローザ・ルクセンブルク——帝国主義論史再考1——,大阪市大,『経済学雑誌』,90-5. 6.

保住敏彦,『ヒルファディングの経済理論』,梓出版,1985.

保住敏彦,『社会民主主義の源流』,世界書院,1992.

保住敏彦,『ヴァイマル共和国後期におけるヒルファディングの社会国家論』,黒滝・相田・太田編,『ボスト・マルクス研究』,ばる出版,2009,所収.

松岡利道,『ローザ・ルクセンブルク,方法・資本主義・戦争』,新評論,1988.

Luxemburg, Rosa, *Die industrielle Entwicklung Polens*, Leipzig 1898, in: Rosa Luxemburg *Gesammelte Werke*, Band 1. Dietz Verlag Berlin, 1970 (肥前栄一訳,『ポーランドの産業的発展』,未来社,1970. 小林勝訳,『ポーランドの産業的発展』,お茶の水書房,2011.)

Luxemburg, Rosa, *Sozialreform oder Revolution?* Leipzig 1999, in: Rosa Luxemburg *Gesammelte Werke*, Band 1. Dietz Verlag Berlin, 1970 (喜安朗訳,『社会改良か革命か,ローザ・ルクセンブルク選集Ⅰ』,現代思潮社,1963.)

Luxemburg, Rosa, *Einführung in die Nationalökonomie*, 1909/1910, in: Rosa Luxemburg *Gesammelte Werke*, Band 1. Dietz Verlag Berlin, 1975 (佐野文夫訳,『経済学入門』,岩波書店,昭和8年。岡崎次郎・時永淑訳,『経済学入門』,岩波書店,1991年.)

Luxemburg, Rosa, *Die Akkumulation des Kapitals. Ein Beitrag zur ökonomischen Erklärung des Imperialismus*. Verlag Neue Kritik-Frankfurt, Dritte Auflage 1969 (初期の復刻本長谷部文雄訳,『資本蓄積論』,上・中・下,青木書店。太田哲男訳,『新訳・増補 資本蓄積論』(第三編),同時代社,2001。小林勝訳,『資本蓄積論』,(第一編),『ローザ・ルクセンブルク選集』,第一巻,御茶ノ水書房,2011.)